

## 山本黎子告別式 二〇一四年八月六日

### 祈 禱

天にいます私どもの父なる神様 あなたは宇宙万物の創造者にいまし、世界の歴史を支配されるとともに、私ども小さな人間ひとりひとりの生と死を宰ってい給うことを、畏れをもって信じ、心から感謝いたします。父なる神様、あなたは山本黎子に命をお与えになり、九十年にわたる長い生涯を祝福し、ここにその深いみ旨によって彼女を御許にお召しになりました。

山本黎子は良きクリスチャン・ホームに生を受け、若くして神を畏れることを知り、イエス・キリストの十字架の贖いによって罪を許され、キリストの復活に与って限りない生命に恵まれました。加えて、あなたの摂理により、伝道者山本泰次郎に嫁して良き助け手となり、共々にキリストの福音の宣教に励みました。豊かな信仰生活の晩年病を得て多少の不自由がありました。今や父なる神のふところに抱かれて「死も悲しみも嘆きも労苦もない」（黙示録二一・４）天の休息に入れられたことを信じ、彼女の靈魂をあなたの御手に委ねます。私どもは心からの感謝をもって山本黎子に告別し、喜びをもって彼女をあなたの許に送ります。

しかしながら、この地上に遺された者はなお朽ちるものをまとって、深い悲しみの中にあります。慈愛と慰めの父なる神様、どうぞご遺族一同の上に、格別に最後まで介護に尽くされた猪股祐子さんの上に、そして山本黎子に愛され、彼女を愛してここに集っているすべての者の上に、あなたの御慰めを豊かにお与え下さいますように切に祈ります。

天の父なる神様、どうぞこの時に当って、「地に落ちた一粒の麦」(ヨハネ一二・24)である山本黎子の生涯に習い、私どもひとりひとりもそれぞれの来るべき終わりの日を思い、厳粛に各自の「生涯の日を正しく数える」(詩編九〇・12)ことができまますように、お導き下さい。この告別式を通して、出席者一同が神の祝福に与り、神の聖名が崇められる折として下さいますように、私どもの友なる救い主イエス・キリストの御名を通してお祈り申しあげます。

## 式 辞

山本黎子様は一昨日午前二時、入居しておられたホームにおいてご逝去になりました。この七月で満九十歳のご生涯でした。(1913・7・14〜2014・8・4)

今日私はご息女猪股祐子様のお求めによつてこの告別式の任を負うことになりました、武藤陽一と申します。実は私は三十五年前の一九七九年三月二十七日にこのお宅で、黎子様のご夫君山本泰次郎先生の葬儀を執り行い、式辞を申し述べた者です。泰次郎先生は私のキリスト教信仰とキリスト者生活の唯一の恩師でありまして、先生との出会い無くして今日の私はありません。ご夫妻の野辺送りができたことを光栄に思い感謝します。

山本先生にわたしが初めてお会いしたのは一九五二年の暮れのことではなかったかと覚えておりますが、先生は五十年一月から聖書伝道雑誌「聖書講義」を復刊、戦後の伝道を開始(私は友人に勧められて購読するようになったのですが)その年の一月「聖書注解の業に専念することを誓って」斎藤氏黎子と結婚されたのでした。ですから奥様との「主に在る交わり」は六十年余になるわけで、実に感無量です。

泰次郎先生が「聖書注解の業」(先生のキリスト教独立伝道の実質)に専念するために結婚された黎子様は全くその通りに生きられた先生に温かい家庭を備え、聖書注解・出版の仕事を助けられました。先生が心筋梗

塞で倒れられた後、十五年程の間には先生の口述筆記などもなさいました。それで私など特に個人的にお話しするような折もありませんでした。お正月の山本家恒例のお汁粉（ご夫妻協同作業による）などはご一緒にごちそうになったのでした。何かの折私がアイス・クリームが好きだと申しあげたら、その後私が参上する折にはいつもアイスクリームを用意して下さったのでした。

山本先生が永眠されてからは、お宅に伺う折もなくなりましたが、先生の十年（一九八七年）、二十年（一九九七年）の記念会にはご子息ご息女方も共にお出まし下され、うれしいことでした。二十年のときには、記念会にという添え書きとともに、泰次郎先生が散歩の時などの暗誦用にとギリシヤ語聖書を手書きされたものをコピーして来会者に配って下され、私ども弟子にとつてはとても有難く、なつかしく思い出すことです。奥様の先生に対する深い敬愛は、私に下さった便りに「この頃はいつも主人の書いた聖書注解を読んでいます」とあったことなどに強く感じたことです。

皆様はよくご存知のことですが、黎子奥様のご実家は、いわゆる「無教会」の間でよく知られた名家で、その家長は斎藤宗次郎でした。彼は東北花巻の出で、内村鑑三に最も近い忠実な弟子として先生の死後に至るまで広くその信仰共同体のために働いた方です。黎子奥様はその斎藤の娘多祈夫妻の五人姉妹の長女（宗次郎の孫）でいらつしやいます。この多祈様即ち母親の晩年にはお宅が近いこともあつて、よく介護に努められたと伺っています。この度はご自分が娘祐子さんの手厚い介護を受けられてまことに幸いなことでした。

宗次郎は内村との関係を中心に実に克明詳細かつ厩大な日記を残したことで有名ですが、そのうち花巻出身で有名な宮沢賢治との関係が深い時代（一九二一〜二六年）を仏教学者と名高い山折哲雄氏が編集された「二荊自叙伝」二巻（岩波書店）には他の妹方とともに協力しておられ、宗次郎関係の諸資料の整理について今井館に対しても多大の貢献をしておられます。

甚だ個人的なとりとめのない話をして失礼しました。

私の申しあげたかったことは、「福音の余慶（余沢）」とでも申しましようか、福音の力が及ぼす本当の意味での幸い、慶事ということであります。それは決して世襲とは全く違いますが、人格的にも社会的にも伏流水のように尽きることなく大きな力と深い命として受け嗣がれていくものだと思えます。

今日私は何かキリスト教らしきことは何も申しあげることにはできませんでした。最後に、この年（恩師の年を越えた）になって、いよいよ身にしみて有難く思っている山本泰次郎先生の死の直前の信仰短文を読んで式辞を終ることにいたします。

主イエス・キリストを信じ、朝夕に聖書を信じるクリスチャンが、もし死に対して、ただ徒らに嘆き悲しむだけで、一片の希望と喜びをも抱き得ないとしたなら、実に奇妙不思議なことである。信者にとっては、死は、実は、天国への門出であり、かしこにキリストに会いまつるための旅立ちであり、天国で神のみ許に永遠の新しい、輝く生命に入る希望へ向かって飛び立つことである。生涯の信仰と希望と祈りとが、ついに叶えられることである。こんな目出たい、喜ぶべき事はないのである。故に信者にとっては、死の悲しみは歓喜であり、涙は悲しみの涙ではなく喜びの涙であるべきである。

これがわれらキリスト信者にとっての死の意義である。故にわれらは、生前から常に天国を望んで信仰に励み、死に直面して徒らに悲しみ嘆くことなく、むしろ喜び勇んで、天国へ凱旋すべきである。また愛する者を送る者も、徒らに信仰なき者のように嘆き悲しむことなく、涙の中にも、愛する者の凱旋祝い、喜び、感謝しつつ、送るべきである。

〔「死の意義」より『聖書講義』四〇三号 一九七九年二月〕